

# 文化原理と反近代の文学

——泉鏡花を軸にして——

三 田 英 彬

## 1

数年前に「北キツネ物語」という映画がありました。子ぎつねたちが成長し、一人前に近づくと、母きつねはある日突然、自分たちの巢から、しゃにむに追い出してしまいます。巢に戻りたがる子ぎつねを猛然と蹴散らし、多少の手傷を負わせてでも、荒野へ追い立ててしまいます。

日本人の観客はこれを、子ぎつねはかわいそうになあと、いう同情をひそめて、観ていたはずですが、だがこれは野生のきつねにしてみれば、きびしい生存の掟なのでした。一人前になったら、親も子もなく、独立し、自力で生きてゆ

きなさい、さもなければ共倒れになってしまふという選択です。

母は子を一人前になったとみれば、きびしく突きはなす。これは欧米人のありように似ていました。

江藤淳の長編評論に、『成熟と喪失——母の崩壊』（昭42・6、河出書房新社）があります。江藤氏は、戦後の「第三の新人」安岡章太郎の「海辺の光景」、小島信夫の「抱擁家族」、遠藤周作の「沈黙」、吉行淳之介の「星と月是天の穴」、庄野潤三の「夕べの雲」等を通じて、わが国における母子関係の、文学に及ぼす問題を論じています。彼は、E・H・エリクソン（精神分析学者）が『幼年期

と社会』で述べている米国での母子関係を、まず対極に据えてみせました。「エリクソンは米国の青年の大部分が母親に拒否されたという心の傷を負っているという」と、紹介します。カントリー・ウエスタンに漂う哀愁には、おそらく母に拒否されて荒野をさすらうカウ・ボーイの心の傷みが、おのずとにじみ出ているはずで、一方、「海辺の光景」を引き合いに出し、比べてこう語ります。

「日本の母と子の密着ぶりと米国の母子の疎隔ぶりのあいだには、ある本質的な文化の相違がうかがわれるはずだといっているのである。この特質が文学に影響を与えないはずはない。そしてもし今日、日本の作家が「成熟」を迫られ、しかも「成熟」の手がかりをつかめずにいるのが実状だとすれば、その原因はおそらくここまで溯らなければきわめられないはずである」

いわゆる「第三の新人」が、戦後の日本文学を代表しているとは決して言えないと、私は思いますが、それにしても安岡、小島らの「母」との関係を通じた未成熟は、江藤氏が指摘したごとくでした。

ただ、「成熟」なるものがありうるとすれば、それはど

うにも日本的なコースをたどる道筋にしかないでしょう。

「母」の背後には永い歴史上の文化の堆積として、「妣」の国にまでいたる、母性原理に立つ文化がありました。その点で、そうストレートにはいかないはずで、

簡単にいえば、安岡章太郎の小説「海辺の光景」では、母は日ごろその夫を軽蔑し、息子との蜜月を楽しんでいる様子でしたが、死の床にあつて、たずねて来た息子を識別できないまま、「お父さん」と、つぶやきます。この息子こと青年主人公の信太郎は、以来、「いくらかの失望とそれに見合った安堵」を感じています。

で、江藤氏は、「「成熟」するとは、喪失感の空洞のなかに湧いて来るこの「悪」をひきうけることである。実はそこにしか母に拒まれ、母の崩壊を体験したものが「自由」を回復する道はない」と言い、信太郎に重ね合わせてこう記しています。

「『海辺の光景』を書きあげたとき、安岡氏は実は「悪」の自覚による新しい「自由」を獲る道を、自ら半ば閉ざしたのである。氏はつまり「純潔」を選んで、「悪」から眼をそらしたのである」

なるほど安岡章太郎氏についてはそうであったかも知れませんが、しかし、たんに「喪失感の空洞」にこの「悪」を充填してみても、「成熟」を得ることができるかどうか。

日本人の場合、地母的文化原理の、どんな政治的変革があらうと変わりえずして続いてきたという歴史があります。欧米との文化原理のちがいを認識し踏まえてみれば、欧米ふうな「成熟」はありえないでしょう。「悪」を引きつけるべきにしても、独特の屈折した道をたどることにならうと、私は考えるのです。

そこで問題は、では、戦後の日本文学のありかたにまでからんでいる文化原理とはいったい何であるのか？ といふところまで遡るでしょう。そこには近代と反近代、近代文学と反近代文学といった問題まで、まつわりついているはずです。

## 2

父性原理と母性原理、男根的父神的原理と子宮的地母的原理といった言い方で、対比的に二大別される文化のかたちがあります。これは世界中の各地にある神話についてそ

の類型を追い、最終的にまとめてみれば、大きく二大別できることから導き出されたありようであり、対比的な文化原理です。

で、日本の近代の文学を考察するとき、こうした観点をまず、前提に導入して見る必要があると、十年前から考えております。今回の話は、実は十年前に金沢の近代文学館で話したときの材料を、大方ふくらまして使っています。別に活字化はしませんでしたので……。

西洋文化の底にあるもの、底にあって全体を規定しているものと、日本文化の底にあって同じく全体を規定しているものとの違いを、まず認識すべきです。こうした比較によって、わが国における近代の文学の、欧米におけるそれとの異質ぶりが鮮明になるはずです。従来、ややもすれば欧米的な借りもののメルクマール、ものさしでしか見てこなかった陰で、日の当たらないまま見棄てられてきた部分が、明らかになるでしょう。トータルなより正確な把握に近づかずです。私たち自身の文化原理をも見据えた、複眼的な把握から、さらには私たち自身の文化原理に沿った把握もまた可能となるはずです。

最初に、文化人類学者の石田英一郎氏の説を紹介しておきます。「二つの世界観」と題した論考の一節です。

二つの世界観の中の第一の流れをくむものは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教のグループである。歴史上血なまぐさい対立抗争をくり返したこの三大宗教が、文化史的に同一の系譜関係にあることについては、ここに改めて論ずる必要はあるまい。いま、これらの宗教に本来特徴的と考えられる宇宙や神の観念を通観してみても、そこには次のようないちじるしい共通点が見出だされてくる。

1 唯一の超越神 神は宇宙の上に、宇宙とは別個に、宇宙に先立って存在する。この超越的な神は唯一つであり、至高絶対である。

2 創造された宇宙 宇宙は宇宙に先立って存在するこの至上神によって創造されたものである。

3 不寛容と非妥協性 この唯一神のほかに神はない。この神を信仰する宗教は、ただ一つありうるのみで、それは「諸宗教の中の一つ」ではない。ここに異教の存在を許容しえない不寛容と、異端に対する激しい

憎しみが正当化される。

4 男性原理 右の最高神が人格化して表象される時には、それは女性ではなくて男性、母ではなくて父であった。そこには万象を産んだ原始の母祖神とはほど遠い、峻厳な家父長的性格が目立つ。

5 天の思想 宇宙の上に存在する超越的な至上神は、天上にあるものとして表象されるのを常とする。祈りに際しても「天にましますわれらの父よ」と呼びかけられる。これらの宗教において常に前面に出るのは、大地とは対照的な天の観念であった。

6 宇宙の有限性 神の手によって創造された宇宙は、時間的にも空間的にも、初めあり終りあるものである。天はいわゆる穹窿をなして平面の大地を覆う。その天地の接するところが世界の果てである。この天も地もその中にある万象も、最高神の意志による終末の運命をもつ。

7 宇宙の合理性 このように極めて截然と表象された宇宙の運行は、またこの創造神の摂理のもとにある。この世界像には、本来、非合理的なものへの介入の

余地がない。

以上のような大ざっぱな概括に対し、中世の神学や、あるいは、たとえばキリスト教の最近の変化を引き合いにし出して、その不当を責めることは容易であろう。

この種の非難は、次に第二の世界観―世界像を背景とするものとして、私の類別する東洋の諸宗教について、いっそうよくあてはまるにちがいない。それにもかかわらず、あえてこの大胆な図式化を試みるのは、人類文化史を大局的にみて、この対置がやはり妥当であり、一見これと矛盾するいくつかの事実は、いずれも本質的でない副次的な現象として、説明のつくもののように予想されるからである。

それでは、第二のカテゴリーに属する世界観というのは、ヒンドゥー教・仏教・道教、そして南ユーラシア大陸の多くの古代宗教や民間信仰の中に、その系統の見られるもので、上記の第一のそれと、まさに対照的であったようだ。

1 所与の存在としての宇宙 世界は世界を超越した神によって創造されたものではない。たとえ生成変

化の過程をへても、当初から何らかの形で与えられた存在として前提されている。

2 宇宙の中の神々 神は単一でもなければ宇宙の外にあるものでもない。人間とともに宇宙の中にある。この世界観は、第一の峻厳な一神教に対して、多神教的、アニミズム的であり、しばしば汎神論に傾く。神々と人間とはそれほど隔絶的でない。

3 寛容と融通性 神々の複数性と人間への近さは信仰の相対性とならなる。そこにはただ一つの真の宗教という観念はきわめて薄い。異教異端に対しても寛容である。ユダヤ―キリスト―イスラム教の世界では想像もつかぬ神仏習合などという現象も容易に行なわれる。

4 女性原理 神々の世界では、女神の地位がかならずしも低いものでないばかりか、多かれ少なかれ、古代オリエントのそれに共通した原始母神的な信仰の痕跡が認められる。哲学的には、『老子道德経』の中にくり返される天地万物の「母」ということばも、この系統に属する思想であると思う。

5 大地の思想 原始母神の観念は「母なる大地」につらなる。大地への親しみは、何らかの形でこの世界観の中に跡づけられる。私は古代オリエント文明との文化史的なつながりから推して、大地の信仰が第二群の諸宗教に本来的なものではなかったかということ想定している。そこに出没する天界の神々も、先に見た超越的な唯一の絶対神―創造神の性格とはほど遠く、問題の本質を変えうるものではない。

6 限定されない宇宙 所与の存在としての世界は、かならずしも明確な限界をもたぬ。須弥山しゆみせんとか四海とかいった地理的な世界像とは別に、空間と時間との茫漠たる無限性や永劫輪廻の思想などは、この第二の世界観の中に起こったものであろう。

7 宇宙の非合理性 超越神の創造と摂理とを認めないこの世界観においては、森羅万象の運行は、合理的な秩序に従うものではない。むしろ八百万やおよぼすの神々をはじめ、精霊や人間の意志がアトムのように錯綜したプロセスではなかったかと考えられる。（「二つの世界観」）

以上に概括されたなかで、日本は当然ながら、第二のカタゴリーに入ります。倭人はもともと稲作農耕民族であり、大地を地母神とみなした神話は多い。一口で言えば、定住農耕民の生活は自然を大地を母神として崇拜する感情を育て、そこに母性原理に基づく文化を築いてきたのです。そして、「弥生時代以来の、稲作農耕文化を基盤として生活してきた倭人の伝統、言語文化というものは」「政治的な征服とか統一とかによって、根本的にくつがえるということはありませんでした」（石田英一郎『日本文化論』昭44・5、筑摩書房）のです。

いわば、武士階級による鎌倉幕府の出現とか江戸幕府の成立、明治維新等、政治変革がどうあろうとも、文化原理こそは変わらず、今日に続いているということです。

こうした文化の国における近代とは、父性原理に立つ国が、もたらしたものでした。受け入れる側にもそれだけの準備があったにせよ、巨視的にはそう言えるでしょう。稲作農耕文化への牧畜文化の侵入であり、自然と調和してありたいとした文化への、自然を征服の対象とした文化の乱入だとも言えました。動物文化の植物文化への突入であり、

植物文化は踏み荒らされたとみることもできました。男性原理に立つ欧米からの、女性原理に立つ日本への力づくのデートだったとする見解（鯖田豊之『日本を見なおす』昭39・8、講談社）もまた、ありました。で、日本近代は、父性原理に立つ諸力によって犯された「母胎」の受難の歴史だと、その負の面からとらえた意見さえ出ることとなるのです。

この場合、いつから近代化が始まったかを問い、こまかく検討することは、さほど重要ではないまま、黒船来航以来と、象徴的に言っておきます。わが国は開国を迫られ、やがて応じることとなりますが、ただし、先述のような言い方は、そう単純でもなかったのです。

江戸時代にあっても母性原理は、村落共同体において強く、一方、東国の武士によって興された鎌倉幕府以来の、武士階級における父性原理は、この時代、「天」を理念とする儒教のなかでも、ことに朱子学を支えに、母性原理を抑圧し、リゴリスティックにより強化されてありました。

明治維新を達成したのは、主として下級武士層でしたが、彼らこそは当時の知識人でもあり、西洋の文化に啓発され

ることを急ぐ反面で、倫理的には根強く、儒学を支えとしていました。

いわば、キリスト教の家父長的神の観念、天の思想、宇宙の合理性といったものに育てられた西洋文化を、わが国における父性原理を支えにした維新の遂行者たちは受け入れやすかった。そんな一面があります。だがしかし、こればかりははなはだ日本的な結合を見せ、日本的な近代を形成してゆきます。それは太平洋戦争後の高度成長経済時代を経て、今日に至るまで続いています。

すなわち、一部の文化人類学者の意見にあったように、支配層が、旧来の父性原理を温存した結果というだけでなく、日本的資本主義体制の発達は、母性原理をも陰湿巧妙に援用したゆえなのです。先に「日本的」と記して傍点を付してきたいわれはそこにあります。

たとえば、個人における自立の精神をなるべく制限し、企業体内で一家意識を醸成、終身雇用制に典型的な、甘え甘えられる関係を長年維持していることは、そういうものとして理解されます。

わが国に独特な、天皇を父性原理の頂点にかつぎあげた

絶対主義体制と、市民社会を望む近代意識と、常に二極構造を内包しながら進行したと理解していますが、この独特な資本主義体制近代のゆがみが、今日でも、さまざまな社会病理現象をひき起こしています。大きく見れば、日本の近代は文化史的にタテに見た場合でも、同時代横断的にヨコに見た場合でも、まさに世界の実験室として、ユニークな混融と変形を見せているはずです。

### 3

以上をもう一度文化史的にみれば、日本は「受容型」であり、欧米は「進出型」といえましよう。歴史学者の鯖田豊之氏は、これをたとえて、ヨーロッパを男性、日本を女性と見たらよいとも言っています。歴史的に見れば、やたらに戦争の数の多いのがヨーロッパで、一四八〇〜一九四一年までで、イギリスでは七八回、フランスで七一回、ドイツで二三回あったとし、この間日本では九回だけだと指摘しています。ヨーロッパの歴史的個性が、戦争日常感、積極性、社会意識、抵抗性、論理性などの男性的性格だとすれば、一方日本は戦争異常感、消極性、家族意識、盲従

性、情緒性など女性的性格なのだ、言うのです。

こうして鯖田氏は、幕末におけるヨーロッパと日本の出会いは、男性ヨーロッパが女性日本に、強引に開門を迫ったものとみるのです。

そこで、日本近代文学の中でも、明治二十年代において主流をなした浪漫主義思潮についてですが、北村透谷を中心に、雑誌「文学界」（明26・1創刊）に拠った人たちがリードしました。この浪漫主義思潮の進出を地ならししたのは、その前の啓蒙思潮であり、政治小説等であるということも、その功利性等は別にして、一応言えただしょう。総じて西洋文明からの刺激に負うことが大であることもいえただしょう。

けれども、受け止めたこちら側にも、すでにそれをよし、好ましいものにとらえる準備があったことも言えました。

で、明治六年に生まれて、処女作が明治二十五年（「冠弥左衛門」）と知られる泉鏡花ですが、文壇的出世作とされる「夜行巡査」（明28・4）、「外科室」（明28・6）の、「外科室」あたりから、浪漫性は強められてゆきます。

この鏡花の浪漫性と、いわゆる洋化に刺激されて生まれ



た浪漫主義と、まったく無縁かというところ、そうは言えないのですが、しかし、本質的には、その拠って立った文化原理にちがいがあつたと、みなしうるのです。

つまり、鏡太郎少年（鏡花）は明治十七年に小学校へ入学、同年中には真愛学校（十八年には北陸英和学校と改称）へ転学しますが、ここはミッション・スクールでした。明治二十年中退するまで、キリスト教的ヒューマニズムをも、ここで教えられています。そうした経歴からしても、また森田恩軒の翻訳本を愛読したこと、鷗外の「舞姫」「即興詩人」を熟読したことから身につけたもの等を考えれば、時代思潮としての浪漫性と無縁だとは言えないことです。だがしかし、それでも鏡花は、大昔から続く母性原理に立つ文化を、懸命に守り立てる側に立った作家だつたと、みなすことができます。

その膨大な作品群の一つ一つに明瞭なのですが、生い立ちからしても、言えます。彼の父は彫金師、いわば職人の息子でした。旧加賀百万石の士族の横暴ぶりを、彼は徹底的に嫌っていました。近所の歳上の娘たちから、口碑伝説のたぐいをたつぷり聞いて育っています。少年期に母を失

い、以来、その「亡母憧憬」は、彼の文学に決定的な影響を及ぼしました。

明治の文学者の大方が、士族の出身であつたとき、鏡花と、鏡花の師尾崎紅葉ばかりはそうではなかつたのです。

ところで、文学上の用語としての「反近代」には、概念が未だ明確でないところがあります。こうした用語が、ということは当然、その概念も、ということになります。問題視され、広く検討されてゆくきっかけとなつたのは、おそらくは「国文学・解釈と鑑賞」昭和四十四（一九六九）年十一月号の特集「近代と反近代」あたりから、三好行雄氏の『日本文学の近代と反近代』（東京大学出版会、一九七二）のころではなかつたかと思ひます。

三好氏の右の著作の中の論考「反近代の系譜」においては、成島柳北、夏目漱石、森鷗外、斎藤緑雨、永井荷風他が、文明開化、近代化に対する批判を内包した文学者としてとりあげられています。いずれも士族を出身とする知識人でした。

もつとも、わが国の近代文学の黎明期になつた文学者の大方も、士族知識人であつたという指摘もまた、なされ

ています。坪内逍遙、二葉亭四迷、北村透谷、森鷗外、幸田露伴、正岡子規等いずれもそうだったと言います。ただ、尾崎紅葉とその内弟子から出発した泉鏡花はそうではありませんでした。

「士族知識人が近代知識階級にまで転化してゆく過程で、かれらの精神構造の内部にひそむ微妙な幽暗が、時として反近代主義への傾斜をうながすことになった例もいくつか残されている。日本近代文学史の本流に見えかくれする、気質的な反近代の系譜である。それは二葉亭四迷・北村透谷・森鷗外・夏目漱石らをピークとする」（「反近代の系譜」）

という精緻な指摘もあります。

すなわち、論考の中で取り上げられている「反近代」的思考ないし気質の持主は、大方近代的知識人の裏の顔なのです。知識人であればこそ、わが国の進行する近代のあり方に疑念を抱き、批判を口にしていくのです。父性原理を幼いときから植えつけられてきた士族側の出身の知識人の良質な部分が、反近代を内包している、近代的な文学者の内部にある反近代の追求が、その論旨だと思われれます。

他方、「解釈と鑑賞」誌には、「文学者における近代と反近代」と題されて、次のような作家が取り上げられています。

成島柳北、北村透谷、幸田露伴、泉鏡花、森鷗外、夏目漱石、永井荷風、谷崎潤一郎、川端康成、小林秀雄、三島由起夫、福田恒存。

標題に掲げたテーマのもとで、目下のところ私に興味があるのは、このうち、泉鏡花、谷崎潤一郎、川端康成、永井荷風といったところです。

つまり、私が追求してみたいと考えている「反近代」の文学とは、以上紹介してきたような近代的な知識人が内にひそめた「反近代」とは、異なった、さらに原理的なものだということです。泉鏡花という作家を例に、考えてゆきますが、ほとんど原理的に、徹底したものでした。

私としては、文化原理、日本近代におけるそのありようから考えると、「反近代」とは、日本古来からの文化原理そのものを墨守しようとした側における、非常に進んだありよう、ときには近代をつき抜けたありようと思われるわけです。たんに古いものを温存しようというのでは、これは

前近代的でしかないのですが、近代化＝イコール父性原理に立つ文化の侵入とみなしたとき、母性原理に立つ文化の側に身をおいて、さらに父性原理に立つ文化を越えるものをまさぐっていた人たちと、考えるのです。

泉鏡花の場合は、まさに傷だらけにされ、踏みつけにされた母胎そのものをかばい、傷口をいやそうとした以上に、一歩も二歩もそこから先へ歩もうとした作家だと思います。

ちよつと最初の風呂敷があまりにも大きすぎて、その収束が鏡花ひとりでは、うまく風呂敷が結ばれまい、包み込めまいという危惧を、私自身感じているのですが、まあ待ってください。先へ進めます。

#### 4

定説化しているように、近代文学のスタートを告げた小説として、二葉亭の「浮雲」があり、鷗外の「舞姫」があります。これらの青年主人公はいずれも父を早くから亡くし、母が家を故郷を守りつつ、送り出してくれるままに、近代へと船出しています。

彼らにとっては母は、近代へと漕ぎ出す動機であり、そ

の出世、栄達は母が第一に喜んでくれるからという価値尺度であり、いずれは都会へ迎えて共に暮らしたいという目標でさえありました。

こうして、近代の草叢期において、二葉亭や鷗外という先覚者にしたところで、母を切りはなした自立などとは到底考えられなかったといえますがしかし、少なくとも、母そのものへ没入していこうというのではまったくなくて、自分たちの近代へ迎え入れようという姿勢でした。

比べていえば、泉鏡花作品の主人公はこういうかたちで、男性原理の世界へとび出そうとは決してしません。鏡花自身は少年期に母を亡くしているのですが、その亡母憧憬のうち、作品の男性主人公も、いつも亡母との一体化を夢見るかたちで描かれます。

大正十年という年を、明治的母子関係を一応対象化しえはじめたとみなして、文学作品を並べてみると、島崎藤村に「ある女の生涯」（大10・7）という短編があります。また、谷崎潤一郎に「不幸な母の話」（大10・3）という短編があり、泉鏡花にその代表作の一たる「由縁の女」（大8・1）（10・2）があります。これらから明治・大正にお

ける「母」の位置をたずねてみます。

「ある女の生涯」のおげんのモデルは作者藤村の姉園子であり、長編「家」のお種としてもその半生が描かれています。この場合、息子を病没させ、夫に先立たれ、精神薄弱の娘ひとりを抱える状態となったときから、母の座はゆらぎはじめます。夫も息子も、木曾の山奥から都会へ、いわば近代へと旅立ち、しかし結局、事業に失敗し、死んでしまふのです。

おげんは、村落定住者として残され、家、故郷、妣の国、旧文化そのものの保守を強いられた妻であり母であったのですが、息子を失い、夫を亡くしたあと、その母としての地位はどんどん崩壊してゆきます。家出し、四年後には東京の精神病院で薄幸な生涯を閉じます。

この自然主義による小説からは、近代における「母」の位置は、夫や息子が、父性原理の支配する世界へと出発を企てたことから、母性原理の支配する村落定住者としての安定を失い、薄幸な生活を招くさまがうかがえます。息子がそれでも健在であったなら、母子一体的な母性原理からして、母に酬いようと志す息子によって、救われてもいた

でしょうが、この場合その息子を失っていたのでした。

一般に「母」は、あるいは旧来の文化原理の側は、ただ置きざりにされたという以上に、欧米に触発された父神的男根的文化原理の備える諸権力によって、気随に利用され、傷まみれにされてもいたのです。

実は「ある女の生涯」も、谷崎の「不幸な母の話」も、「母」なるもののイメージ」（有斐閣双書『近代文学』10巻、昭53）で触れているものですから、簡略にしますが、「不幸な母の話」こそは、近代と反近代をふくむ日本的な近代の相をティピカルにえぐっています。

これは長男が恋愛したとき、相手の娘を母が息子の嫁に選んだように事を選ぶことによって、結婚に成功します。しかしその後、悲劇は生じます。伊豆半島への新婚旅行の途中で、合流した母をまじえての帰途、便船から乗り継いだはしけが、国府津の浜へ近づいたところで転覆し、長男が最初に助けたのは、妻でした。母もその後、地元の漁師に救われるのですが、以後、母子関係にひびが入ります。結局この長男は母との甘え甘えられる関係、反近代的状況にどっぷり浸っていたことによって、自立しえないまま、

おしつぶされるし、母は母で、母子一体感を失ったとき、生きる気力をなくしてしまうのです。

## 5

こうして、わが国の時間的な意味における近代文学の中の反近代を、小説にたずねるとき、これは正負における負、陰陽における陰、今日における表通りに対する裏通り、都会に対する田舎から、文学作品をみつめることになるとも言えましようが、それ自体かつては表通りであったはずのことでした。あたかも江戸時代には夷蝦の往還において日本海航路が表通りであったかのようにです。

そしてこうした両面を見据えないかぎり、トータルした文学史はありえないと、私は考えます。

この負の側から見たときのチャンピオン、文豪の名に値する作家が、泉鏡花です。鏡花がなぜ未だによく読まれるかといえば、太古からの日本の文化原理そのものの擁護者であり、彼を受け入れる土壌がその意味で、たっぷりあるということも基本的に言えることです。もちろんそれだけではありませんが。現代の作家の成熟を考えてみても、反

近代としての鏡花の文学を無視した成熟はありえないと言っている。わが国にその文化を遡上するとき、「妣」の国までいたる母性原理の文化の堆積があるとき、欧米ふうな進展はありえないということです。

このように文化のかたちがちがうとは、わが国の文学にもある幻想性、幻想文学を考えるとき、大事なことです。鏡花の幻想小説を考えるにしても、そうした大前提を頭にに入れておくべきことだと言つてよい。ほとんど原則として、下敷きに通しておく必要があります。それを踏みはずして、ヨーロッパにおけるロマン派の幻想小説と対比し、ヨーロッパ文学的メルクマールを持ち込んでみても、評価をたがえてしまうでしょう。

父性原理に立つヨーロッパの幻想文学の場合は、日常的現実と非日常的超現実の世界とは、明快な対立を示していると思います。大昔に、砂漠の遊牧の民が、平らかな地平から天を仰ぎ、星辰をみつめて超越的な唯一神を夢見たように、また、同じ文化原理から生じた彼らの合理的な思考からして、その幻想の論理、想像力においては、日常はまさに水平に拓き、幻想は垂直に広がる空間を描き出します。

早い話が、それは明治四〇年五月、登張竹風と泉鏡花によって共訳されたハウプトマン作の「沈鐘」によっても知れるでしょう。山上の妖精たちの世界と星の人間界とを対比的、二元的にとらえています。中間を往復する人間（ハインリッヒ）はいますが、二元的構図は図式どおりです。

このハウプトマンの「沈鐘」に影響されたとみていい鏡花の作品に「海神別荘」「天守物語」「夜叉ヶ池」その他があります。しかし、本来の鏡花の描く幻想性とは、日本古来からの文化原理に、ぴったりとはまっています。

それはいかにも日本的な他界意識であって、日常性といつものからみ合って発動されます。幻想それ自体が水平的なものです。庶物崇拜の根強くあった風土にあって、別に非日常的超越的な幻想ではないのです。また、たいていの家に仏壇がありました。死者と生者の世界がふだんに親しいものであった生活の場から生み出されてくる幻想です。

「一歩さがって言えば、近代以前という膨大な歴史的時間の中で、衆庶においては、他界を感じとり、意識し、考えるということが、いつでもふだんの暮らしの中であり得たということ、鏡花の怪奇と幻想の文学を考える場合、ま

ず認識する必要がある。鏡花文学の幻想性は、この日本的な他界意識にぴったりとついている。だからそれは、日常性といつものからみ合って発動されてくる。死者と生者の世界が、ふだんに親しいものであった生活の場から、生み出されてくる。別に非日常的な夢、超越的な幻想ではなかった。

こうした視点を捨てたまま、欧米のロマンの文学に培われた目だけで、鏡花の幻想性をみつめても、結局、十分ではないだろう。たとえば「高野聖」にしても、山川草木というより小動物にいたるまで庶物崇拜的な他界意識を抱く生活の歴史があつたればこそ、描き得た浪漫的怪異小説であつてみれば、キリスト教的世界の文学にそのような性格の作品があつたとは思いがたい。汎神論的世界が、ふだんの暮らしに入りこんでいた日本という風土にあって、発想し得た他界意識であり、幻想性であつた」（「高野聖ノート」）（昭49・3「国文学解釈と教材」）

と、かつて私は記したことがあります。そういえば「沈鐘」にも森の精や池の精が現われるではないかと、反論されるかも知れません。ヨーロッパにも、

カソリックによって統一されるまでは、土俗信仰、庶物崇拜はずいぶんあったと知れるし、カソリックが広く信仰されるようになったのちも、生き残っているものはありました。しかし根本態度において、唯一神、超越神の存在が認められています。また、非合理的なものはみな宗教すなわちキリスト教の領域にまかせて、合理主義を徹底させていった歴史とからめて考えて、彼らの幻想はその根本において、二元的だと思われれます。地上と天界、日常と非日常がはっきりしているのです。

ですから、その点で、畏友笠原伸夫氏が、「現世的世界を描いたものは時間軸が水平に開き、幻想的な世界を開いたものは垂直に立つ」（『泉鏡花―美とエロスの構造―』）と、言うとき、私には異論があり、さにあらずと思えます。「後者は垂直な切り込みをみせ、他界と現世とにまたがる超越的なものの姿が時間を越えて描かれる」という図式は、半面の真実を伝えやすくするでしょうが、鏡花の場合は剣呑なことだと思えます。

## 6

幻想小説がもてはやされたのは、昭和四十年代の後半あたりからでしたか。鏡花のそれはしかし、これも水平的な現実の一つではないのか。むしろ深層心理、無意識の領域、C・G・ユングのいう自己の領域を、日常的現実とないまぜで描いているといえる場合がよくあります。

この点でシュール・レアリズムに似ていないこともないでしょう。ヨーロッパの十九世紀のロマン主義小説では、前にも記したように現実と非現実、日常と非日常をはっきりと対立的にとらえていると思われる。だがシュール・レアリズムでは両者を同列に見て、しきいをつくらない。鏡花にはこのシュール・レアリズム的美学の傾向を強く感じると、生島遼一氏が語っていたと思えます。

これは、そう感じて当然だと私なども思いますが、ただし、周到的用意をもってはたされていると私は見ますので、その点で生島氏と見解を異にします。幻想というより幻覚に近いものが多いとは言えそうですが、「芝居の中で、まづそれらしいムードをつくってから幽霊を出すなどという手法ではなくて」と、生島氏は言います。なるほどたしかに歌舞伎等に見る鳴物入りのこけおどし的なおどろおどろ

しはななくとも、もつとはるかに周到な用意、それも心理的に自然な道筋を用意していると思えます。

ところでアンドレ・ブルトンは、精神分析学を援用した自動筆記法（オートマチスム）による最初の作品「磁場」を一九二〇年に発表しましたが、その後、夢や眠りを通じて「心の自動現象」をさぐり、一九二四年には、「シュールレアリスム第一宣言」を発表しています。これは大正十三年のことです。精神分析学の文学への援用という試みから、ブルトンは出発しています。

シュールレアリスムについて、「心の純粹な自動現象」であり、理性の働きや審美的倫理的な配慮をまったくかえりみずに深層意識に照明をあてて、心に浮かび上がるイメージやことばを迅速に書きとめて、人間の意識の働きを全的にとらえようとする事。」「夢と現実との混交や遠く離れた事物の連結による詩的閃光などを重要視する」（『西洋文学辞典』新潮社）と、辞典にあります。発生論の系譜は鏡花の場合、まるでちがいます。だいたい深層心理学などまったく知らないわけです。そして「審美的倫理的な配慮」をしつつも、「人間の意識の働きを全的にとらえよう

とすること」という面で異なりまた似ていると思われま。す。「草迷宮」における主人公葉越明が、秋谷悪左衛門を先導に、この世とあの世のあわいで、手毬唄を聴く場面などは、シュールレアリスム的だといってよいでしょう。

昭和四十七年一月刊の「現代詩手帖」別冊「泉鏡花号」あたりから、鏡花の再評価について云々されることが目立つたと思いました。私もまた、その新しさをふくめて『由縁の女』と鏡花文学』（「文学」昭50・7）で、及ばずながら触れたことがありました。で、再言は避けたいが、一口で言えば、二十世紀の文学を先取りしているところがあるということでした。

わが国において、フロイディズムを援用した二十世紀の心理小説からの影響が顕著に見られるのは、昭和五、六年からです。それ以前から、紹介やら、特定の作家への若干の影響はあったでしょうが、淀野隆三や伊藤整のマルセル・ブルーストやジェイムス・ジョイスの作品の翻訳紹介による影響が大きいはずです。

ヨーロッパにおけるそれは、アンドレ・ブルトンに知れるように、目に見える現実と超現実の間にしきいをとりは



ずそうとしたところに始まっていると思われませんが、泉鏡花こそは、これをずいぶん早くから、たとえば、「化鳥」（明治三十年＝一八九八年）で、すでにはたしているわけです。

ジェイムス・ジョイスの「ユリシーズ」は一九一八年から連載が始まり、一九二二年に出版されました。プルーストの「失われた時を求めて」の第一編「スワン家の方へ」は一九一三年、全巻の刊行は一九二七年に終わっています。他方、鏡花の代表作の一つといってよい「由縁の女」は一九一九年（大正八年）から連載が始まり、一九二一年には刊行されていますから、ほぼ同時期のことです。

で、「由縁の女」にも、「内的独白」とか「意識の流れ」<sup>シンクロティ</sup>、「同時性」といった表現方法の使用が認められるのです。

「由縁の女」は四百字詰原稿用紙八九一枚に及ぶ長篇です。鏡花にとっては「風流線」「続風流線」の合計を別にすれば、最大の長篇ですが、実質的には十日か十一日間のこと、全四十三章を「序破急」と分けてみて、「急」に入る前の三十三章めまでは、わずかに四日間のことを描いているにすぎません。

ふつう、ヨーロッパの当時における新技法は、人生のあらゆる相を描き尽くそうとして試みられたものと言われませんが、鏡花の場合は、日常的現実とはとにかくがう真実の世界が、人間の生にはあるのだとして、描き続けられたことです。

ただし両者は、発生の淵源において、まるでちがう。ヨーロッパでは、十九世紀的リアリズム、可視的世界を描くにゆきづまりをおぼえはじめ、一種の総合的な小説、人間のすべてをその深層心理までふくめてとらえつくそうとした、そうした時代的な欲求があったに對して、わが国の近代文学思潮においては、そうしたゆきづまりすらなかったと思います。

ただ鏡花においては、山川草木すべてに精霊は宿るとか、闇の世界や自然そのものまで日常にとりくるまれて親しいものとしてある母性原理の文化の側に立ったゆえにこそ、はたされたのだと思います。巨視的に見て、言えると思います。いわば反近代の側に、かえって二十世紀文学としての新しさがあつた。西洋文学の吸収を目論む側にはなく、鏡花の文学の側にあつた。美術の世界にしろ、文学の世界

にしろ、国際性を獲得できる作品は、例外なく民族的なもの、日本人であれば日本的なものでしょう。それだけの文化の堆積の重みを背負っているからです。

同じ意味で、反近代Ⅱ母性原理に立つ文化の側に、身を寄せていった作家として、谷崎潤一郎の存在は大きいと思われまますし、芥川龍之介の半面とか、川端康成とか、永井荷風とかの存在が、気になるところなのです。かかる意味での反近代の系譜がまた、考えられるはずはです。

（これは上田女子短期大学国語国文学会の60年度大会における講演の記録です）